

軍靴の響きかまびすし

保土ヶ谷区支部 遠藤 陽子（子）

戦没者 遠藤 一郎

戦没地 インドネシア

インドネシアのスマランに実戦はなかった。しかし、《スマラン事件》に巻きこまれ、ブルー刑務所で銃殺された父の死が知らされたのは昭和二十一年秋だった。父の勤めていた企業の三菱では、混乱していた情報から確認のためひとまず取り置かれ、父の死は行方不明ということに母に伝えられた。

所属の固有部隊名は、第十六軍司令部で通称《治一六〇二部隊》といった。当時の厚生省援護局からの母宛の公式文書には昭和二十年十月十五日スマランに於いて戦死となっている。

疎開していた群馬から母は妹を連れて毎月東京まで給料をもらいに通った。そんな疎開先で、昭和二十年八月十五日近所の人達と一緒に私は祖母と地主さんの家に集められ、ピーピーガーガーと鳴るラジオから天皇の声を聴いた。

「戦争は終わった！」大人の話にこの言葉だけは記憶している。抜けるような蒼い大空のもと、「戦争が終ったんだね、お父さん帰ってくるね」と祖母に話しかけていた。

今、父からの手紙をパラパラと読んでみると、留守宅を心配する父の気持が良くわかる。門司から届いた手紙に依ると、当時軍需産業に係っていた企業の代表者たちは、司令部に内地出発の予定を確認のために日参している様子が詳しく書いてある。しかし、司令部ではなかなか情報提供してくれず、日程不明と言いながら日々大型船に八千〜一万人の兵士を乗せ出港して行く船を見ていた。桜組（企業から軍属として参戦する者）などには教えられない。一度東京に帰れとくり返すのみだった。腹に据え兼ねた父は「我々は骨身を削って国のため、軍のために働いているにも拘わらず、一度東京に帰れとは何事だ」と一喝したらしい。驚いた彼等は、態度を改め少しずつ情報をくれるようになったと書いてある。

昭和十九年五月三十一日午前十時ついに門司港出港となり、台湾、マニラ、シンガポール等に寄港し、造船技術など見学しながら八月三日スマラン着という手紙がきたが、船中の様子やジャカルタの様子などを書くという手紙はついに家に届かなかった。この最後の手紙には「早朝から鳴き交う鳥の声、話し相手に飼ったオウム、マレー語の先生を探すこと」の終りに留守宅を気遣う様子が細かく書かれている。公式記録に依ると、現地の終戦は二十年九月二日とある。

昭和二十一年六月からジャカルタより引揚船は出ているが、新聞を目を皿のようにして読んでいた私たちにはついに「帰ったよ」の声を耳にすることはできなかった。

今年の夏、娘は下関、門司方面へ連れていってくれた。あの狭い関門海峡の特殊な潮流を利用し、出入港する大型船を眺め旧門司港やJRの門司港駅がいかにも「軍靴の響きかまびすしかった」か思いを巡らせた。